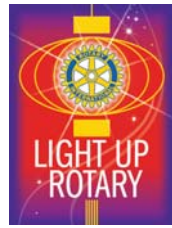




2014～15 年度
国際ロータリー会長

ゲイリー C. K. ホアン

Weekly Report Niigata



ロータリーに輝きを

2014～15 年度 国際ロータリーのテーマ



2014～15 年度
新潟ロータリークラブ会長

高橋 秀樹

新潟 RC 10月第 4例会 (2014.10.28) No.3061

(1) ロータリーソング「それでこそロータリー」斉唱

(2) 高橋 秀樹会長挨拶

本日は、みなさまお待ちかねの月見例会です。会員参加者は 62 名、さらにゲストは、会員御家族、米山奨学生、ローターアクト会員など 15 名を数え、全体で 77 名の盛大なお月見となりました。ご参加の皆さまに厚く御礼申し上げます。内山さんが準備して下さった素晴らしいお月さま、そして親睦委員会のみなさんの入念なお手配によるお料理とアトラクション等々、ぜひごゆっくりお楽しみください。

さて私のほうでは、たくさんのお客様のご参加に感謝して、お礼のメッセージカードなど用意しようと考えておりましたが、お月見ということもありますので、秋の月をめぐる和歌をお礼の言葉に添えようと思い立ち、古今和歌集と新古今和歌集からお客様おひとりにつき一首ずつ選んで短冊にしたため、メッセージカードといたしました。そして、せっかくですからこの十五首を参加者全員にご覧頂いてお月見に興を添えさせて頂こうと思い、ささやかな冊子を用意いたしました。コンビニエンスストアのコピー機を使って手作りで制作した粗末なものでございますので、見苦しいところもあるかと思いますが、そここのところはロータリーの友情の精神でどうかお赦しくくださいますようお願いいたします。

そして、ただ冊子をお渡しするだけというのも素っ気ないので、会長挨拶で目を通してみようかと思いますが、十五首全部はたいへん時間がかかりますから、一部取り上げたいと思います。

最初に、大江千里の歌をとりあげましょう。古今和歌集の 193 番の歌ですが、小倉百人一首の 23 番目の歌でもあり、よく知られている歌でございます。月を眺めて独り物思いにふける心のありさまを表現しています。「かなしい」という言葉が入っているので、今日のような席で取り上げるのはいかがなものかとも思いましたが、月を詠んだ和歌としてあまりにも有名なものですので、やはりはずす訳には参りませんでした。作者の大江千里はすぐれた文章博士（もんじょうはかせ）で、漢詩にも通曉していました。この歌も、有名な漢詩を踏まえて詠んだものであるとされています。世界中の文物が交流しあって新たな社会と文化を生み出していく現代と相通ずるところがあるのではないのでしょうか。

次は、明るくさわやかな歌をとりあげましょう。新古今和歌集の 413 番にある左京大夫頭輔の歌ですが、これも小倉百人一首に含まれており、その 79 番目の歌としてよく知られています。さわやかな秋風に流れる天空の雲、その切れ間に見える澄み渡った空から、月の明るく清らかな光が大地を照らし出す、心が洗われるような瞬間を表現しています。本日の例会でも、日頃の嫌なことを忘れて大いに楽しんでさっぱりして頂き、明日への活力を得ていただければと思います。

もう一つとりあげましょう。新古今和歌集 407 番の上東門院小少将の歌は、月の美しさをめでる人の心が変わらないものであることを表していますが、まさに、平安時代の人々と変わることなく現代の私たちもまた月を愛で、今宵宴に集うにいたっております。日本人にとって、時を超える心の財産として、和歌がいかに素晴らしいものであるか感じさせられます。

しかし、つい十数年前、この和歌が危機的な状況にあったことは、あまり知られていないかもしれません。平成の時代になってから、宮中歌会始に寄せられる詠進歌の数が激減し、最盛期の半以下になるとともに、とりわけ若い世代から寄せられる歌が少なくなり、各種短歌大会や新聞歌壇でも同様の傾向が見られるという時期がありました。宮内庁で歌会始を司っている人々はこれを憂い、次のように考えました。「およそ今日の短歌には、歌としての力がなくなっている。日頃、目にする同時代の短歌は、概ね暗く難解であったり、安易な日常そのものであったりして、先ずは格調に欠けている。また、思わず声に出して、朗読したり、歌ったりしたくなるような言葉の調べや声の響きに欠けている。かつて歌が持っていた美しさや快さ、親しさや優しさに欠け、そして何よりも、人の心を動かす力を失っている。」（日本文化財団編『和歌を歌う 歌会始と和歌披露』笠間書院 2005 年 p.2）

この対策として行われるようになったのが、宮中の歌会始をそのままのスタッフで正確に再現したり、歴史的に有名な歌合を再現したりする、大規模公演の実施でした。これが平成 10 年から国立劇場他で数度にわたって開催され、大変好評を博しました。現在の和歌ブームや日本語ブームの背景には、このような出来事も関係しているのかもしれませんが。私もその公演の案内を頂いて、日本文化の保存と発展に関わることができると思い出かけたことがあります。

ます。

和歌の披露は、所役の役割分担のもとに進められます。読師（どくじ）が無言で全体の進行を司り、講師（こうじ）が歌の題や作者名などを紹介します。そして歌を披露しますが、黄鐘調、つまり洋楽のラに近い音で、一本調子に、節をつけずに、五七五七七の各句を長くひきのばして強く言いきります。これによって歌の言葉がはっきりと示されると、発声（はっせい）という役を務める方が、初句を節をつけて朗唱、すなわち歌いあげます。そして二句以下から、発声のリードによって、講頌（こうしょう）という役の四人以上の人々が唱和していくことになります。ここで歌を味わい、鑑賞することになります。

いずれにせよ、本来の和歌の鑑賞は、文字を読むことによってではなく、歌うことによって行われていました。そして、歌う時には、合唱によって感動を分かち合うことが尊ばれました。声を合わせて歌うことの大切さを、往時の文化人はよくわかっていたのです。

さて、我らがロータリークラブでも毎週ロータリーソングを歌い、また催事のさいには「手に手つないで」を歌います。ロータリーソングの由来がアメリカにあることは言うまでもありませんが、合唱によって感動を分かち合い、思いを共有することは、平安の昔から日本古来の文化の中にも息づいています。歌詞の意味を噛みしめながら、毎週のソング斉唱や「手に手つないで」を楽しみたいと思います。

**（最終ページに当日、高橋 秀樹会長が配布された
秋の月古歌 15首を掲載致しました。）**

(3) ゲストの紹介

鷺頭静子さん、樋熊須美子さん、石本陽子さん、木滑紀美子さん、竹石宏子さん、高橋歩さん

米山奨学生 朴 治国さん

新潟ローターアクトー 8名

(4) 各種ご寄付の発表

ロータリー財団寄付発表(樋熊 紀雄委員長)

得永 哲史君

米山奨学会寄付発表(宇尾野 隆委員)

得永 哲史君

青少年育成基金寄付発表(小林 敬直副委員長)

得永 哲史君

(5) ニコニコボックス紹介

・得永 哲史君 10月21日創立60周年を迎えることができました。皆様の支援に感謝しております。

・細野 義彦君 丹羽の畑にゴボウが採れたので先週ロータリー料理研究会のレシピのサンマの時雨煮を作り“一流料亭の味”と家内に褒められて、気を良くしています。しかし調子に乗って余り頑張ると我が家の料理長に任命されかねないので、ほどほどにしたいと思っています。毎回楽しくご指導頂いている新潟調理師専門学校の吉田さんに感謝しニコニコします。

(6) 表彰

・新潟ロータリークラブ 2013-14 年度ロータリークラブ・セントラル賞

・新潟ロータリークラブ 2013-14 年度ガバナー賞(会員純増2位)

・竹石 松次君へ 2013-14 年度ガバナー賞(会員増強8名)

・渡辺 洋一君へ 2013-14 年度ガバナー賞(会員増強3名)

(7) 本日の出席率 66.31 %

(2週間前メーク後 81.92 %)

11月4日の例会予定

財団月間に因む会員スピーチ

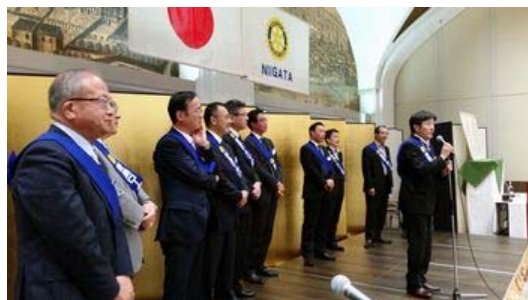
樋熊 紀雄 R 財団委員長

新潟ロータリークラブ会員専用ホームページアドレス

<http://www.niigatarc.jp/>

懇親会

- 16:30 親睦委員集合：受付等準備
17:00 受付開始
17:30 例会開始・点鐘
18:00 懇親会開会：親睦委員長挨拶
18:03 乾杯：横山パストガバナー
18:10 催し物：小林よしえ社中：民謡
19:00 歓談
19:45 中締め：石本パストガバナー
19:50 手に手合唱
20:00 閉会



平成二十六年新潟県クリンクアグ月見例会

秋の月 古歌十五首



古今和歌集より七首

一八四 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 二八九

新古今和歌集より八首

三八三 三八八 四〇〇 四〇五 四〇七 四二一
四二三 四二八

大江千里

二

月みればちづともものこそかへりけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど

壬生忠岑

又方の月の桂も秋はなほ

もみぢすればやてりまゝあらむ

在原元方

秋の夜の月の光をあかければ

くらぶりの木も越えぬづらなり

よみ人知らず

秋の月山辺をやかたてらせるは
おつるもみぢの葉を見よとい

堀河院御歌

いよこしや高田山の雲間より

光さしそふる張の月

大宰大貳重家

月見れば思ひぞあへぬ山高み

いづれの年の雪にいはるらん

三

宜秋門院丹後

四

忘れず難波の秋の夜半の空
と浦に澄む月に見るとも

大江千里

いづれか今宵の月の曇るべき
小倉の山も名も変ふらん

上東門院小少将

変らば知るも知らぬも秋の夜
月待つはどや心ばかりに

大朝言經信

月影の澄みゆくか矢の原
雲吹きはらふ夜半の嵐に

左京大夫顕輔

秋風にハナびく雲の絶え間より
漏れ出づる月の影のさやけさ

攝政太政大臣

雲はみなはらなけてはる秋風を
松に残して月を見るかな

五